

## 「防災×楽しさの新提案！～子どもたちを惹きつける学びのカタチ～」

### 1 はじめに

#### (1) 子どもの心をつかむ防災教育の必要性

平成23年(2011年)の東日本大震災、平成30年(2018年)に発生した胆振東部地震では、津波、土砂崩れ、大規模停電や断水など様々な災害が発生し、事前に災害に備えることの必要性を改めて強く思い知らされることとなった。

今後ともこうした大規模な災害の発生が懸念される中、学校と市町村教育委員会、警察、防災関係部局などの関係機関が連携を一層強化することで、子どもたちに自ら身を守る危機対応能力を身に付けることが求められており、幼児期から高校までを通して発達の段階に応じた防災教育を一層推進することが必要である。

#### (2) 北海道教育委員会が行う防災APについて

子どもたちが災害等から身を守ることができるよう、自ら危険を予測して回避するための知識や行動を身に付けるなど危機対応能力、規範意識、社会貢献できる態度を育成するため、より効果的な防災教育の充実を図ることが求められている。

こうした状況の中、北海道教育委員会では、道内6か所にある北海道立青少年体験活動支援施設において、「防災AP(アクティブ・プログラム)」を実施し、独自に開発した体験プログラムを通じて、災害が発生した場合でも、子どもたちが、主体的で安全に行動できる力や進んで貢献する態度を育成している。

本プログラムは、災害発生時に主体的で安全に行動できるスキルや態度を身に付ける「自助の活動」、避難所開設前の避難者を助けるとともに開設後の運営を補助するスキルや態度を身に付ける「共助の活動」といった2つの要素を取り入れることにしている。

また、具体的な活動内容としては、“災害のメカニズムや特色を知る”“身を守る術を知る”といった全施設が共通で取り組む「共通プログラム」と、“地域の防災・減災の対策を知る”といった各施設の立地及び環境を生かして行う「選択プログラム」から成り立っている。

当施設は、活火山・駒ヶ岳の麓に立地していることもあり、駒ヶ岳や森町市街地等を巡り、火山や津波の災害と防災対策を学ぶ活動に取り組んできた。

### 2 ネイパル森における防災教育の実施状況

前述のとおり、当施設では駒ヶ岳で今後発生することが想定される、火山噴火をテーマに、防災・減災について学ぶ主催事業を主に小・中学生を対象に実施している。

また、防災教育の取組は幼児期から高校までを通して継続的に実施し、知識や技能を蓄積することが重要なため、学校が行う宿泊学習や課外活動の中に、防災・減災の学習を組み込むことができるよう、教育課程を意識したプログラムの開発も進めてきた。

これらの取組を実践するためには、教育以外の多様な分野の方と連携した取組を推進することが不可欠なため、地元自治体などと連携した研修や大規模避難訓練にも積極的に参加し、分野の枠や専門の枠を超えた連携・協働の体制構築にも努めてきた。



## (1) 主催事業

当施設では、防災・減災について学ぶ主催事業を関係機関からの協力を得て、令和4年度から取り組んでいる。

令和4年度「防災キャンプ」では、災害を深く知るとともに、日頃からの備えや災害発生時の対応を体験的に学び、身に付け、行動に結び付ける意欲を高めることをねらいとした。

避難時に持ち出す物品を決めるゲームを行ったほか、缶詰等の保存がきく食材を活用した防災クッキングを行うなどして、学びを深めた。

また、鹿部町の防災課防災危機管理官の徳丸照彦氏を講師に迎え、駒ヶ岳噴火の仕組みについて映像や実験を交えた講義を受講した後、現地に赴き、岩石や観測機器についての詳細な解説を得て、火山に対する知識を身に付けた。

令和5年度「防災キャンプ」では、災害や防災について学ぶ活動や体験活動を通して、日頃からの備えや災害時の対応を知り、自ら進んで人のために働こうとする心を育てることをねらいとした。

函館地方気象台の協力のもと、大雨災害や地震・津波の被害、防災に関する知識を身に付けたほか、津波シミュレータを用いて、通常の波と津波の発生過程の違いを体感した。

また、森町防災交通課の盛川秀雄氏を講師に、避難所運営ゲーム北海道版（愛称：DOはぐ）も体験した。子どもたちは、避難所で起こり得る様々なイベントにどのように対処するか考える活動を通して、日頃の備えや災害時の対応について学んだ。

事業参加者からの満足度は高く、子どもたちの防災・減災に対する意識を高めることはできたが、他の主催事業と比較すると参加人数が少なく、防災に対する興味・関心が高くはない子どもたちの参加を増やすことが課題となった。



## (2) 受入事業

当施設には、学校の宿泊研修や市町村教育委員会が行う体験イベントなどで、多くの児童・生徒が訪れて利用している。そのような方々が、駒ヶ岳や森町市街地などを巡り、火山や津波の災害と防災対策を学ぶことができるように、防災をテーマとした受入プログラムの開発を行うほか、地元自治体等と連携した取組も継続的に行っている。

### ①防災をテーマとした受入プログラムの開発

森町市街地が傾斜に富み、海拔の変化が大きい地形であることを活用した「海拔王『ハザードマップラリー』」を開発し、令和4年度から受入プログラムとしての提供を本格的に開始した。

この活動は、津波に関わる案内表示や避難所などを巡り、災害や防災について学ぶ活動であり、ラリー終了後に行うふりかえりでは、グループごとに自分が住む地域ではどのような備えが必要か考えるなど、防災・減災への当事者意識を高めることを重視している。

また、駒ヶ岳地区を巡る既存の「ウォークラリー」についても、防災の観点を取り入れることとし、新たなチェックポイントとして、降灰調査地点や観測カメラを取り入れることで、施設周辺のフィールドを活用して火山防災について知識や理解を深めることができるようになった。

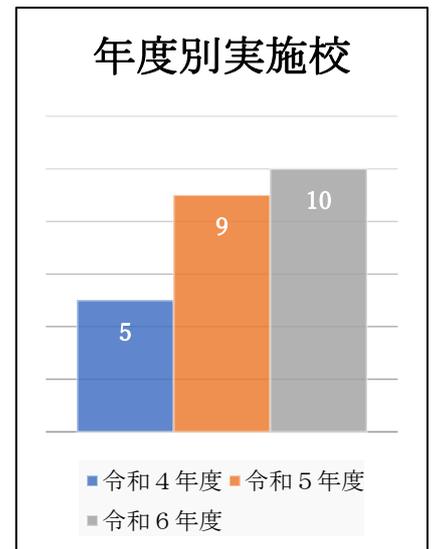
## ②実施校の推移

令和4年度から令和6年度までに、当施設で防災をテーマとした受入プログラムを実施した学校数の推移は、右のグラフの通りである。

森町市街地で行う「ハザードマップラリー」に加えて、施設周辺で行う「ウォークラリー」の提供を令和5年度より開始したことにより、実施する学校の数が増加している。

函館市内の小中学校の中には、「ハザードマップラリー」を実施するためだけに、当施設を日帰り利用するケースもあった。活動に当たっては、施設に駐在する社会教育主事の指導のもと、東日本大震災の被害状況を学ぶとともに、グループごとに防災グッズの優先順位を決める「防災だ・ず・ん」というコンセンサスゲームを行うことにより、充実した学習機会になったと好評を得ている。

本取組を学校の教育活動に積極的に取り入れてもらうため、広報活動を行ったこともあり、渡島管内の高等学校地歴公民科教科研究会に所属する教員が、当施設の取組に注目し、「ハザードマップラリー」を実際に体験するなどの動きもあった。



## ③実施した団体からの声

- ・今回の活動は、活火山による災害を身近に感じることができ、防災について考える良いきっかけとなった。今後実施する1日防災学校の取組では有珠山の噴火とその防災に関する活動を行うが、今回の学びを生かして継続的に防災について考えさせたい。(高等学校教諭)
- ・海拔を意識して避難方法を身に付ける学習は、校内で行う防災学習の事前指導に役立てられる。今後、地域住民や保護者が防災・減災について考える活動につなげたい。(小学校教諭)

## (3) 地元自治体等と連携した取組

### ①登山研修

当施設では、駒ヶ岳の山開きに合わせて、職員の登山研修を実施し、登山ルート of 安全確認や、無線機の通信状況を確認している。また、森町・七飯町・鹿部町の3自治体からなる「駒ヶ岳火山防災協議会」が開催する研修会にも職員が参加している。

本協議会には、周辺自治体の防災担当者らが参加し、火山活動の観測態勢などを確認するために実施されるもので、入山規制されているエリアも含めて観測機器や火口の状態を確認し、関係者の火山防災に対する理解や意識を高める機会となっている。



### ②大規模避難訓練

当施設は、駒ヶ岳噴火時には避難しなければならない「避難促進施設」に位置付けられており、独自に「北海道駒ヶ岳噴火時等の避難確保計画」を策定している。年に一度、森町が主催する北海道駒ヶ岳火山噴火防災避難訓練では、この計画の実効性について検証を行うほか、参加者及び参加団体相互の役割や連携を確認するなど、地元自治体と連携した防災対策の強化を図っている。

### 3 課題に対する対応 ～令和6年度主催事業「TEAM ネイパルそなえ隊」～

#### (1) 今年度の事業の3つの方向性

防災教育を広く普及させていくためには、防災・減災に興味・関心の低い子どもたちをいかに取り込むかが重要であると考え、参加意欲や学習意欲の向上に向けた取組を行った。

#### ①意欲や関心を引き出して、主体的に防災・減災の取組に参加する

映画予告のようなキャッチフレーズを使用したり、事業内容の詳細をシークレットにしたりするなど、チラシを受け取った子どもたちの参加意欲や期待感を高める広報とした。

##### 1 広報の工夫

- ・事業内容の詳細をあえて伏せることで期待感を高める予告チラシ
- ・謎の組織サイガーイからの挑戦状というキャッチフレーズを用いた参加意欲を刺激する本チラシ

##### 2 活動内容の工夫

- ・パルレンジャーvsサイガーイという対戦形式を取り入れた活動
- ・「災害に立ち向かう＝防災に関する知識や技能を高める」という学びの必要性を生む活動構成

##### 3 座学と体験のバランスの工夫

- ・座学<体験という活動量のバランス
- ・それぞれの学習効果や必要性を考えた活動順序の工夫

#### ②専門家の協力によって、正しい知識や技能を習得する

子どもたちへの指導経験が豊富な自衛隊員や周辺自治体職員を講師に招聘することにより、最新の防災に関する知識と、より実践的な技能を習得できるようにした。

##### 1 防災に関係する機関からの協力

- ・自衛隊函館地方協力本部と森町防災交通課の協力
- ・前年度の成果と課題を共有するための綿密な打ち合わせ

##### 2 最新の防災情報の提供

- ・「備蓄品は最低1週間分用意しておく」「保管のしやすさから段ボールベッドからコットにシフトしている」など、最新の防災情報の提供

##### 3 ネイパル森オリジナル教材の開発

- ・避難所運営ゲーム北海道版(愛称:DOはぐ)を参考にした、小学生が楽しみながら活動に取り組めるオリジナル教材の開発

#### ③学んだ内容を日常の生活に活かして行動につなげる

実際に災害に遭遇したときや避難所に避難したときに、主体的に行動できる子どもの育成を目指し、活動内容の難易度の設定やふりかえりのタイミングなどを工夫した。

##### 1 自分一人でも「できる」と思わせる活動

- ・学校で既に学習した内容をクイズに取り入れることで、意欲や集中力を高める工夫
- ・難易度を下げて成功体験を増やす活動設定

##### 2 学んだことを活かしたいと思わせる活動

- ・身の回りにある日用品を用いた防災グッズ(新聞スリッパ・ゴミ袋ポンチョ)の製作
- ・学んだことの活用場面を想起させる声掛け

##### 3 学習内容の理解度を高めるふりかえり

- ・学習内容の定着を狙った活動ごとのふりかえりの実施
- ・防災・減災に関する多様な意見や考えを交流し合う場の設定

## (2) 今年度の事業

### ①事業概要

- ・ねらい

防災に関わる様々な体験活動を通して、災害に対する備えや災害時に役立つ知識や技能を学び、災害発生時に主体的で安全に行動できる態度を身に付ける。

- ・日 時

令和6年9月28日（土）～29日（日）

- ・対 象

小学校3年生～中学校3年生

- ・参加者

合計43名（小学生39名、中学生4名）

- ・協 力

自衛隊函館地方協力本部、森町防災交通課

- ・学習プログラム

	10:00	10:30	12:00	13:00	14:00	15:30	19:00	19:30	22:00	
9/28 (土)	受付	プロローグ	サイガーイからの攻撃 (防災クイズ)	昼食	体育館に 寝床を準備せよ (避難所設営)	避難者を救え! (防災ゲーム・講話)	与えられた食材で 空腹を満たせ! (グループで豚汁調理)	疲れた体を 焚き火で癒せ! (火を囲んで振り返り)	入浴 就寝準備	就寝
	6:30	7:00	7:30	8:30	10:30	11:30	12:00			
9/29 (日)	起床	朝食	片付け	最終ミッション! (防災用品づくり)	エピローグ	閉会式	解散			

### ②具体的な活動

#### ア、プロローグ

参加者が防災に対して親しみを持ちやすいように、ネイパル職員が謎の組織「サイガーイ」とその仲間に扮し、様々なミッションを参加者に課す形式で展開した。謎の組織に立ち向かう「パルレンジャー」の一員となった子どもたちは、グループごとの決めポーズを作って対抗するなど、楽しみながら学びを深めていった。



#### イ、防災クイズ「サイガーイからの攻撃」

参加者は、サイガーイから出題される、防災の基礎知識を学ぶクイズに解答するため、グループ内でそれぞれの意見を熱心に出し合い、解答を導き出していた。防災や減災に関して既に知っている問題が出された参加者は、嬉しそうにグループ内の他のメンバーに答えを伝える様子が見られた。



#### ウ、避難所設営「体育館に寝床を準備せよ！」

体育館を実際の避難所に見立てて、グループで協力して寝床を作る活動を行った。施設内の様々な場所から運搬してきた布団や段ボールベッド、プラスチック製の仕切り板などを用い、プライバシーへの配慮、天井からの落下物への対応、寒さの対策など、実際の災害発生時をイメージしながら設営を行うことができていた。



#### エ、防災ゲーム・講話「避難者を救え！」

北海道総務部危機対策局危機対策課が作成した「DOはぐ」を参考に、本事業のために当施設で新たに開発した小学生向けの防災ゲーム「もりはぐ！」に取り組んだ。参加者は、災害発生時にどのような行動をとるべきか、大人でも判断に困る設問に迷いながらも自分なりの答えやその理由を考えて発表していた。ゲームの様子を見ていた、森町防災交通課の盛川秀雄氏からは、平成5年に発生した北海道南西沖地震の自らの体験談をもとに、「避難所では心身を健全に保つことが必要で、日頃からの備えも重要である」という講話があった。参加者は講話に真剣に耳を傾け、自分たちがどのように行動や準備をすべきか、考えを深めていた。



#### オ、野外炊事「与えられた食材で空腹を満たせ！」

被災時の共助の大切さを学ぶため、野外炊事を行った。参加者は、おにぎりづくりと豚汁づくりの2グループに分かれて調理を行った。日頃使うことの少ないガスコンロの使用方法が分からず苦労する様子も見られたが、懸命に調理を行い、全員が空腹を満たすことができた。



#### カ、焚き火「疲れた体を焚き火で癒やせ！」

日没後はグループごとに焚き火を行い、火を眺めながら一日目の事業をふりかえって、二日目の活動への思いを強くしていた。なお、その後行った、体育館での宿泊体験は、咳や歩く音など、少しの物音が睡眠に大きな影響を及ぼすことを学ぶ機会になったようだ。



#### キ、防災食体験

二日目は、災害発生時に、市町村等から配布されることのあるアルファ米を食べる体験を行った。森町から提供されたアルファ米に湯や水を入れて、しばらく待つだけで、五目御飯やドライカレーができあがる様子に驚いていた。一部の参加者からは、「防災食は一回だけなら良いが、これが続くとキツイな」という感想が出されるなど避難が長期化した際のストレスの大きさについても話題となった。



## ク、防災用品作り

避難所の撤収後、自衛隊函館地方協力本部の武田忠夫氏の指導のもと、日用品を用いた防災グッズづくりを行った。今回は、ビニール袋ポンチョと新聞紙スリッパを作成したが、子どもでも簡単に作れることに驚いていた。また、毛布を用いた簡易的な担架づくりでは、少ない工程で作った担架で、ネイパル職員の大きな身体が持ち上がるのか不安そうに見つめていたが、見事に大人の身体を持ち上げる様子を見て大きな歓声を上げていた。



## ケ、エピローグ（ふりかえり）

全ての活動を終えた参加者は、活動をふりかえりながら、「避難経路や避難場所を確認しておきたい」「1週間分の備蓄品があるか確認して準備したい」「災害時に子どもでもできることがあると知った」など、学んだことを用紙に記入していた。

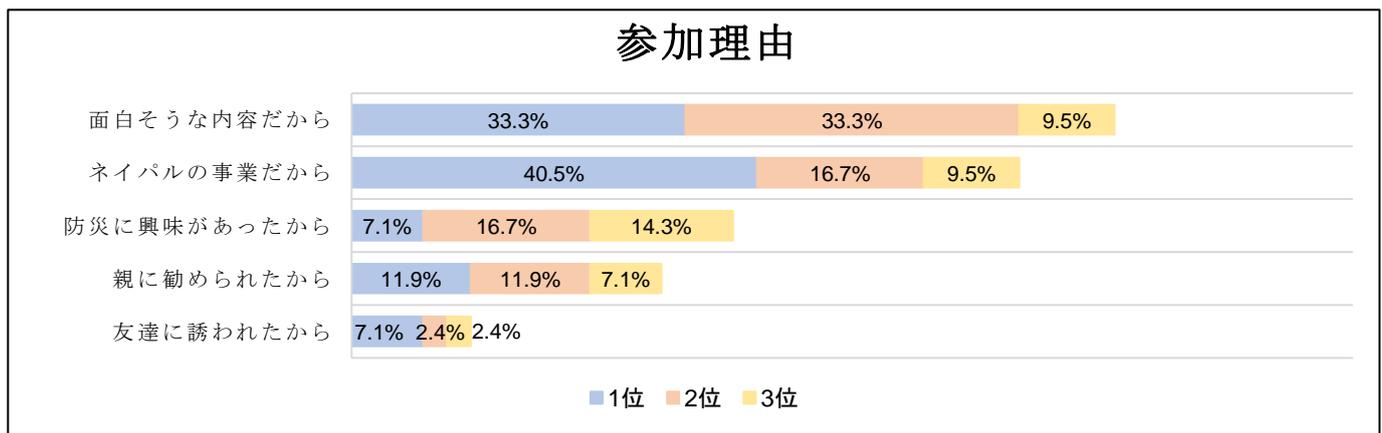
### (3) 参加者及び保護者の事後調査の結果から

当施設の主催事業では、事業の成果及び課題を明らかにするため、事業終了時に参加者に対するアンケート調査を実施している。本事業では、通常の調査に加えて、児童・生徒の行動変容を確認するため、事業終了後の事後調査も行った。

- ・ 調査の目的 : 事業に参加したことによって、参加者の防災・減災に関する知識や技能、意識等に変容が生じたかを調査することで、当施設における、今後の防災A Pの取組を一層充実していくため。
- ・ 調査対象 : ①事業に参加した児童・生徒 43名  
②事業に参加した児童・生徒の保護者 43名
- ・ 調査方法 : WEB フォームを活用したアンケート調査
- ・ 調査回収期間 : 令和7年9月29日(日)～11月6日(水)
- ・ 調査回収結果 : ①事業に参加した児童・生徒 35名 (81.3%)  
②事業に参加した児童・生徒の保護者 35名 (81.3%)

#### ①参加理由（複数回答可）

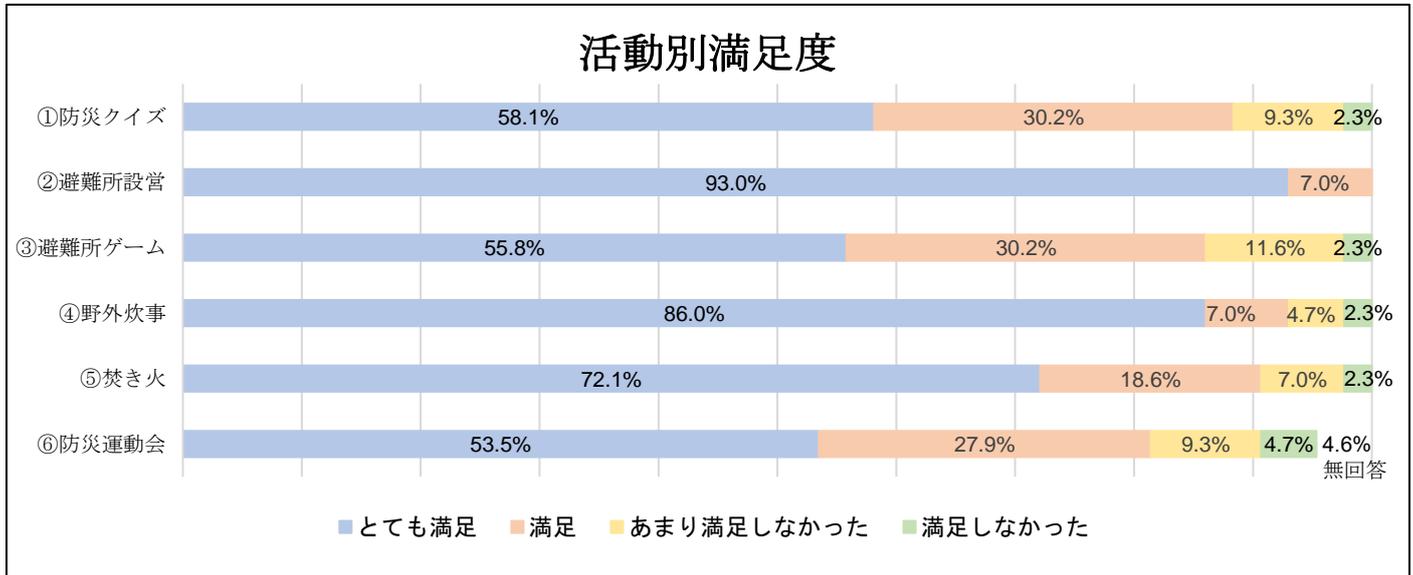
参加理由については、「面白そうな内容だから」「ネイパルの事業だから」「防災に興味があったから」「親に勧められたから」の順に回答が多かった。回答の傾向は、他の主催事業と比較しても同様の結果で、大きな差は見られなかった。



## ②各活動の満足度

本事業では、大きく分けて6つの活動を実施したが、全ての活動で「とても満足」「満足」といった肯定的な回答が8割を超えた。「避難所設営」100.0%、「野外炊事」93.0%、「焚き火」90.7%といった身体を動かしながら学ぶことのできる活動が高い満足度となった。

一方で、「避難所ゲーム」86.0%や「防災クイズ」88.3%といった、講話や説明といった内容については、満足度が若干低下し、子どもたちは座学よりも体験活動を通して学ぶことで、学習への興味・関心が高まる傾向にあることが分かった。

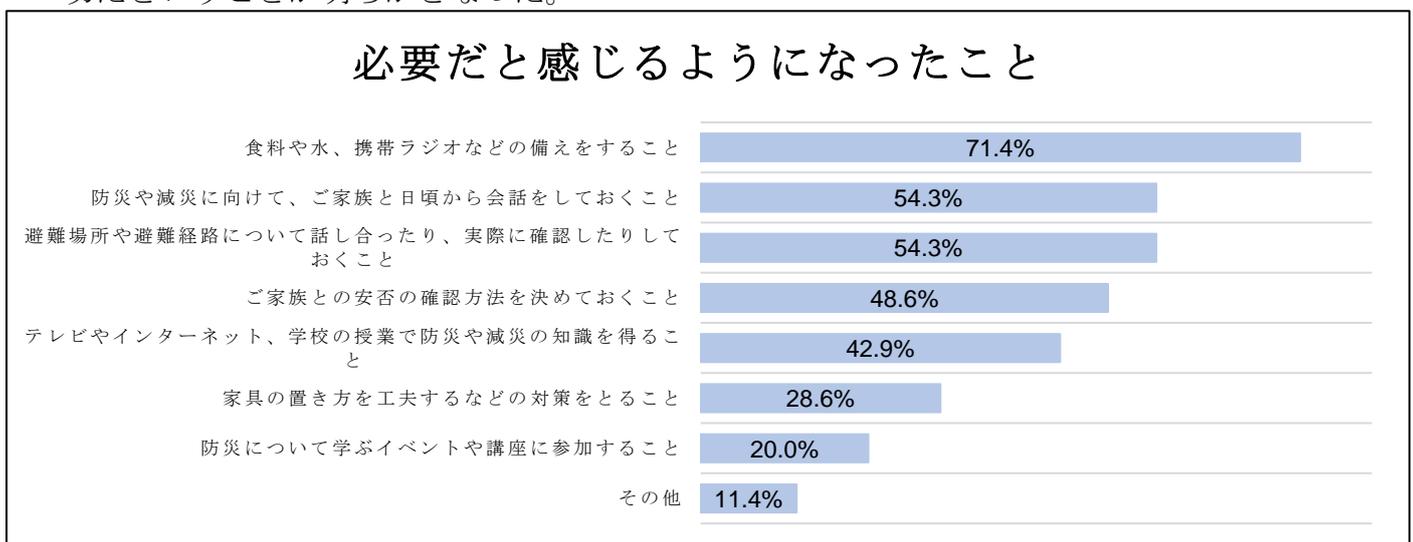


## ③防災・減災のために必要だと感じるようになったこと

本事業への参加を通して、防災・減災のために必要だと感じるようになったことを聞いたところ、「食料や水、携帯ラジオなどの備えをすること」71.4%、「防災や減災に向けて、ご家族と日頃から会話をしておくこと」54.3%、「避難場所や避難経路について話し合ったり、実際に確認したりしておくこと」54.3%などの設問で高い数値となった。

これは、事業の中で講師から何度も繰り返し伝えられていた、「事前に備えをしておくことが大切である」「自助を行うためには実際の避難場所や避難経路を知っておく必要がある」ということを子どもたちがしっかりと学んだ結果といえる。

一方で、「防災について学ぶイベントや講座に参加すること」は20.0%という回答にとどまり、“防災”というキーワードだけでは参加意欲につながりにくく、興味・関心を引く工夫が大切だということが明らかとなった。



#### ④防災に関する興味・関心の高まり

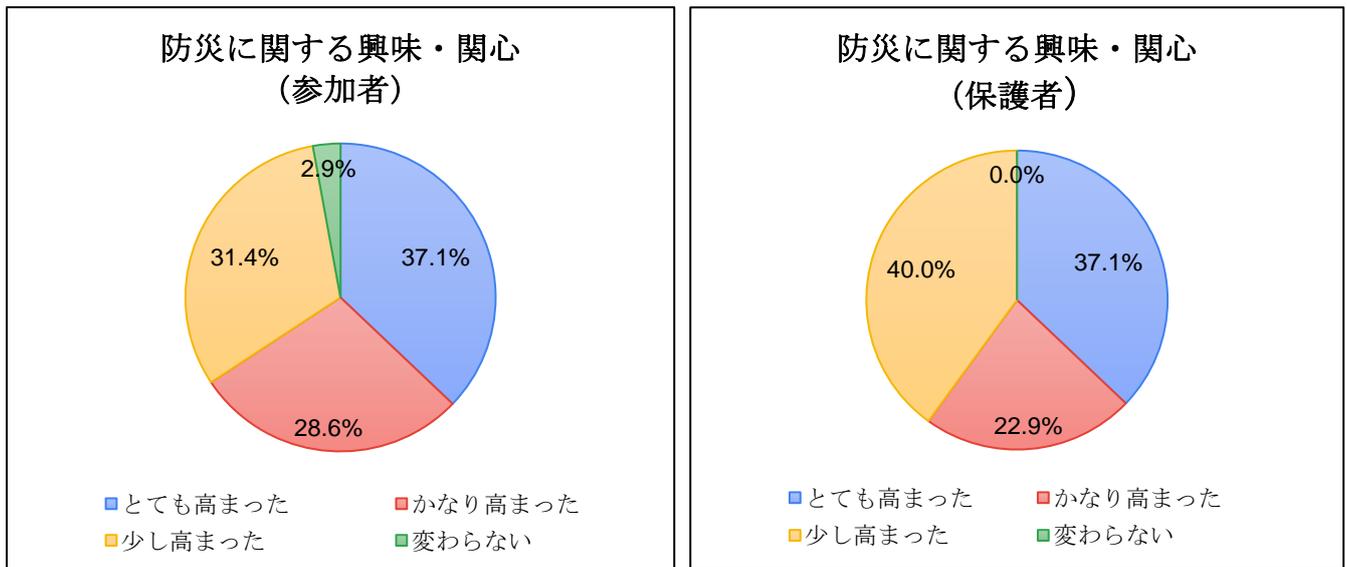
事業後の防災に関する興味・関心の高まりについて、子どもだけでなく保護者に対しても同じ内容で調査を行うこととした。

子どもに対する調査では、「とても高まった」37.1%、「かなり高まった」28.6%、「少し高まった」31.4%という結果で、本事業に参加したことで、興味・関心を高めることができた。

保護者に対する調査では、「とても高まった」37.1%、「かなり高まった」22.9%、「少し高まった」40.0%という結果で、子どもに対する調査と同様で、肯定的な回答が多く寄せられた。

なお、事業参加前に防災に関する興味・関心があった子どもとなかった子どもでは、事業終了後の調査結果に有意な差は生じなかった。

このように、全体を通して活動にストーリー性を持たせることによって学習意欲を維持させたり、適当な難易度設定で成功体験を増やす工夫を取り入れたりしたことにより、事業参加前の興味・関心に関わらず、事後調査の結果を高めることができた。



#### ⑤事業後に防災・減災に関して行った行動

本項目は、事業に参加した子どもたちが、事業後に防災・減災に関して何らかの行動をとったか確認するものだが、「何らかの取組を行った」と回答した家庭が94.3%、「取組を行っていない」と回答した家庭が5.7%となった。

具体的にどのような行動を行ったか確認したところ、「防災や減災に向けた家族の会話」62.9%、「安否の確認方法の決定」40.0%、「食料や水、携帯ラジオなどの備蓄の充実」34.3%、「避難場所や避難経路についての確認」34.3%と続いた。

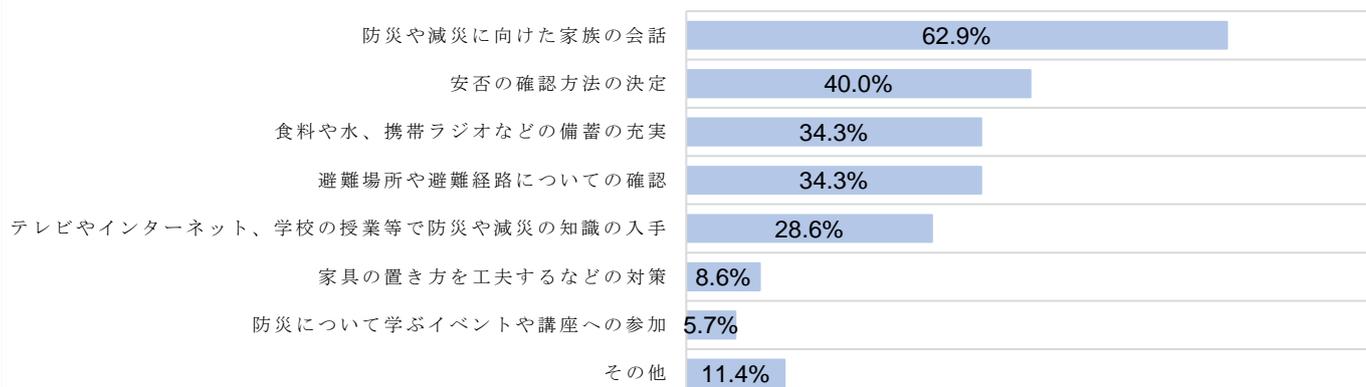
特に回答割合が高かった「防災や減災に向けた家族の会話」については、「体験したことや学んだことをたくさん話してくれた。」「防災のことを沢山教えてくれた。」などの記述があり、子どもから保護者に対して積極的に防災について話題にしているのが注目すべき点である。

また、「安否確認の方法の決定」「食料や水、携帯ラジオなどの備蓄の充実」「避難場所や避難経路についての確認」についての回答割合が高いことは、講師が北海道南西沖地震を例にして自宅から避難所まで避難する時の様子を、自らの実体験を紹介されたことが、子どもたちの印象に残り、自分事として考える契機になったようだ。



一方、回答割合が低かった「家具の置き方を工夫するなどの対策」に関しては、子どもだけでは行動に移すことは難しいことなどが回答に影響を及ぼしたものと分析する。

## 事業後に防災・減災に関して行った行動



### (4) 成果と課題

#### ① 成果

- ・家庭においても手作りの防災グッズやゴミ袋ポンチョを製作したり、災害発生時に避難所などで生かせる知識や知恵を家族や友達に伝えたりするなど、防災・減災に対する知識や技能を身に付けることができた。
- ・災害発生時の連絡方法の確認や備蓄の提案など、防災・減災に対して意欲を高め、主体的に学び、学んだことを行動に移そうとする、主体的な態度を育むことができた。
- ・事業参加をきっかけに、家族で地震や火山について話し合ったり、避難経路を親子で確認したりするなど、参加者・保護者双方の防災・減災の意識を高めることができた。
- ・体験活動の時間を増やしたり、広報に工夫を加えたりしたことによって、防災・減災への興味や関心があまり高くない層からも注目を集める事業にすることができた。



#### ② 課題

- ・本事業では、小学校3年生から中学校3年生までを対象としていたため、参加者の防災・減災に関する知識や技能に大きな差が生じたように感じた。多くの参加者にとって学びの深い活動にするためには、参加対象の幅をもう少し狭めることや参加者の状況に合わせた活動内容や支援の在り方を検討することが必要である。
- ・参加者の発達段階に応じた的確な支援を行うためには、講師・運営スタッフ・ボランティアとの事前の打合せをより綿密に行う必要がある。



## 4 今後に向けて

### (1) ネイパル森における防災をテーマとした主催事業の在り方

当施設では、今後も防災の事業を実施することとしているが、その際に重要なことは、これまでの取組で蓄積した次の4点のノウハウを生かすことにある。

- ①子どもたちの参加・学習意欲、集中力の向上を目的としたゲーム性に溢れた事業構成
- ②子どもたちの集中力を高めるため、講座・説明と体験活動・演習の適度なバランス設定
- ③企画段階から、防災の担当者からの協力を得ることで、専門性の確保
- ④防災・減災に興味・関心の低い子どもたちの参加意欲を向上させる広報の工夫

また、今後は、子どもたちが学習したことを日常生活の中でも役に立つと実感させる仕掛けを取り入れることも重視したい。そうすることで、子どもたちが防災をテーマとした学習や活動に親近感を持ち、「もっと学んでみたい」「学んだことを家族や知人にも伝えたい」といった、主体的な態度を育むきっかけを作ることにつながるだろう。

加えて、防災をテーマに設定しない主催事業においても、防災の観点を少しずつ取り入れることや、子どもたちだけでなく保護者や地域住民が学ぶ機会の提供も検討していきたい。



### (2) 防災をテーマとした受入プログラムを宿泊研修等でさらに提供

防災教育は、学校や地域のみならず、様々な機会・場を通じて幅広く推進していく必要があるため、当施設としては、主催事業はもちろんのこと、宿泊研修や受入事業においても防災教育に引き続き取り組む必要がある。

今後は、開発した受入プログラムの普及・活用に加えて、既存の活動プログラムに防災の視点を入れることも検討するほか、本事業で行った防災ゲーム「もりはぐ!」を宿泊研修等で利用する学校向けに対象学年や学習内容、実施時間などに改良を加えて積極的に活用していきたい。

### (3) 学校、家庭・地域と連携・協力した取組の推進

体験活動支援施設として防災教育をより一層推進していくためには、学校や家庭・地域、関係機関との連携により、多くの子どもたちに学びの場を提供していく必要がある。幅広い切り口で事業を展開していくためにも、これまでも協力を得ている森町防災交通課、函館地方气象台、自衛隊函館地方協力本部などの公的機関に加え、防災士会や地域防災マスターなど、地域で草の根の活動を行う方々と連携・協力した取組を進めることで、より専門的かつ最新の防災に関する知識や技能の提供や新たな体験プログラムの開発を行っていく。

本報告書の内容をもとに、当施設における防災教育の実施を検討される場合には、遠慮無くお問い合わせください。また、当施設の利用及び主催事業の情報については、下記の二次元コードから確認することが可能です。

発行者：北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森

電話：01374-5-2110

メール：[nakama@napal-mori.org](mailto:nakama@napal-mori.org)

発行年：令和7年（2025年）3月27日

